



野馬臺詩國字抄  
完



高蘭山先生述 書舖甘泉堂

# 野馬臺詩國字抄完

野馬臺の詩の撰撰成具の述 漢法とある邊り  
<sub>野馬臺の詩の撰撰成具の述 漢法とある邊り</sub>  
<sub>野馬臺の詩の撰撰成具の述 漢法とある邊り</sub>  
<sub>野馬臺の詩の撰撰成具の述 漢法とある邊り</sub>  
<sub>野馬臺の詩の撰撰成具の述 漢法とある邊り</sub>  
<sub>野馬臺の詩の撰撰成具の述 漢法とある邊り</sub>  
<sub>野馬臺の詩の撰撰成具の述 漢法とある邊り</sub>  
<sub>野馬臺の詩の撰撰成具の述 漢法とある邊り</sub>  
<sub>野馬臺の詩の撰撰成具の述 漢法とある邊り</sub>  
<sub>野馬臺の詩の撰撰成具の述 漢法とある邊り</sub>  
<sub>野馬臺の詩の撰撰成具の述 漢法とある邊り</sub>

## 野馬臺詩國字抄叙

野馬臺の文人は并膾炙と傳ふ者なり  
然も意義小至は殆望洋を採往々解あ然  
ともし亦兒輩不得易うと云 愚は為小高并  
先生法筆試勞し之專に抄を記る令也  
本并上し之を字知る童に彼文以解を  
くめんと云。

台麓書房星運堂

寛政丁巳孟春



野馬臺

野馬臺の文八梁

の禪僧寶誌和尚

作所之室誌姓は

朱氏金城の人事ハ

高僧傳小出昔時

室誌行道の日記女

忽然として来て

語ると舊より相

識まるが如く一女去

まふ一女來り如斯

始定壤天本宗初功元建

終臣君周枝祖興治法主

谷孫走生羽祭成終事衡

填田魚贈翔世代天工翼

孫子動戈葛百國氏右輔

昌微中干後東海姬司為

白失水寄胡空為遂國喧

龍游窘急城土茫茫中鼓

牛食食人黃赤與丘青鐘

腸鼠黑代雞流畢竭猿外

丹盡後在三王英稱犬野

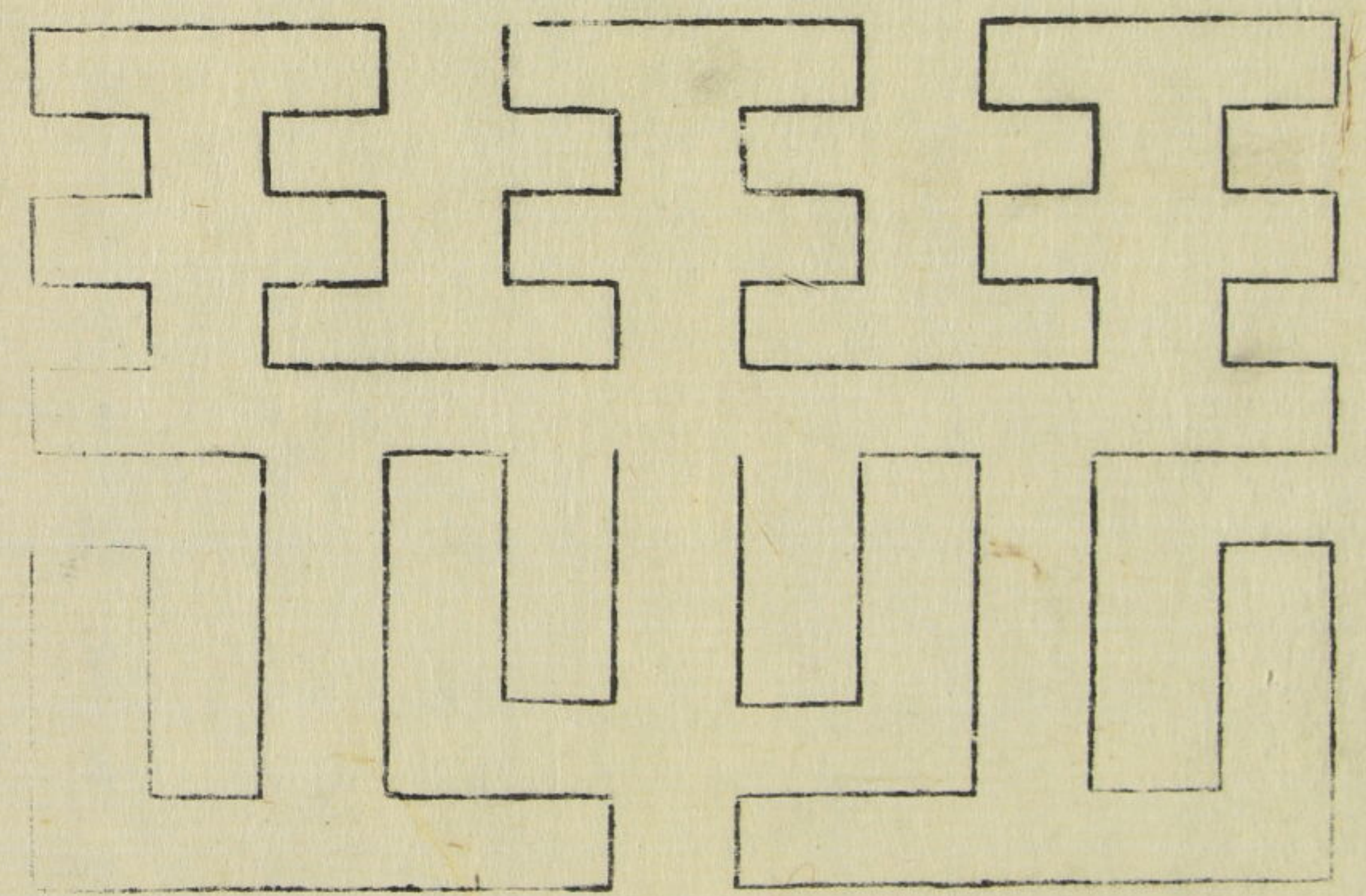
水流天命公百雄星流飛

とるこ一十八人々  
皆國の終始と云  
和尚悟て十八人の  
女成以て字と作  
まハ則倭の字と  
なる仍て倭國の  
神ると我知於  
彼女の言一はて  
十二韻の詩と作  
將來小貽を日本

自是より讀らめ東海姬氏國と引る  
通りは江江遂為空と尾是め讀畢  
國字附末小あま見合心履

の識文之吉備大臣  
 武帝は前小是と説  
 小日項祈念と云本  
 邦和州長谷の觀音  
 蜘蛛と現し絲と曳  
 て讀み梁の誌公ハ  
 是觀音大士みして  
 自ら倭国の識文  
 城作を秘も知は  
 能くしゆと云云

蜘蛛を曳く圖



世に傳ふ往昔日本ハ大唐貢と奉け其使と遣唐使と云人王  
 四十五代聖武天皇ハ御宇宰相安倍仲丸遣唐使と云官物ハ  
 貢び此時異朝の天子と梁の武帝と云官物の微少を以て仲丸  
 と改め陳とて云我萬里の波濤を離れ遠旅の客とされ數の賊王  
 城推しど願ハ皇帝怒と省て後度の入貢を待た武帝忿止とて竟ハ  
 仲丸と荒原に叢殺さる一説高樓に其靈魂悲恨と青天昇て鬱  
 陶の赤鬼と成動とれ帝の近て慨恨を爲し其次の遣唐使吉備  
 大臣之此時仲丸が魂來告て云我ハ仲丸之官物の微少ハ仍て殺さ其  
 冤深し故ハ赤鬼と成荒原に住て日本ハ慕ふ熟先事ハ思ハ  
 紅淚連々と君も又責らば我是ハ惻隱故ハ此事ハ公ハ告と

吉備公明朝奉内一官物以獻之帝又官物の微少と称して吉備  
公責んと然るも國の法めて答ぬ死を殺さば其才能と試て達せざる  
者ハ殺と是ゆ於て巧議て日本のや圍碁碁知づる吉備公に圍碁  
勝んば戮とと百官皆吉備公の萬死以思ふ其夜三更の頃鬼又  
來公に告て云君明朝碁局に勝んば忽殺せん公愕て我未圍碁  
碁知らば其法如何鬼が云夫棋局ハ盤面四九三百六十の目黑白の小碁  
三百六十箇有て一歳の中數に配て黑白ハ上十五日の月れ白光と下  
十五日の月の黒魄に象は是と以互に盤面を置て兩目相續て生  
とし續ぶる死と云也教公と鬼の脊を負て紫宸殿へ上り  
通夜圍碁と見せしむ明日公召て棋と圍しづるに公竟不勝て

死免於次ハ武帝又議て昭明太子作る所の文選と與一讀と能  
んば殺せんとい其夜又鬼來て云帝あが此謀有帝常に文選と  
好で讀る公今宵我れ從聞ふとて公と背上に負帝座近く隠て帝れ  
讀み聽しむ因て吉備公明日是とも讀得て免る第三に亂行不同の  
文と作て公に讀しめんと宝誌和尚の命せざる此僧神に感とると有て  
野馬臺の文と奉於學士群集して讀み其理と知と五言十二韻百  
二十字扶桑の讖文也鬼又告て云此般の謀ハ我も善しと我本邦の神  
佛に祈て求めると云畢て去公大に驚懼と日東小向て顙拜せしむ  
て伏て云其ハ佛天の加被力と以一字一言滞なく誦めると天小仰地小俯  
血泣懇請は殊に公常に和別長谷寺の觀音公信と此時觀音大悲分

身代化と毒の蜘蛛と現れ公と救ふ明日殿上此書と讀に文字  
紛亂義理辨難るる意已に腦愁ふ時一蜘蛛下來東の字に  
落漸歩小絲成曳其行蹟因て是に讀に暴然として開明公  
畢讀得て唐人皆歎美次吉備公爰に於て萬死成出て恙なく歸  
朝とて成得たり大士の感應可貴可敬と云吉備公飯朝の後此  
書必秘して傳て後代此文あはれを讀むものも五十代桓武天皇の御  
時野相公小野岑守の子篁の子勅して讀しめられ殆く竟小長谷寺に  
詣して三七日祈誓以大士又應感の化身蜘蛛と現れと誌する是  
より本朝盛に行きまう故に觀音の悲願愈著く此文と稱して  
日本の未來記と云

蜻蛉を野馬と云臺ハ國と云意之日本國の形象蜻蛉小似り又  
云日本最初小生る國大和之此故小日本の總名も大和と云則野  
馬臺之莊子逍遙遊の篇小野馬也塵埃也云云春日澤中の  
遊氣野馬の馳る如くと云陽燄是之以て野馬臺の出所と云非

字の四聲韻字ハ兒童の分辨し難きことと云抄の因に  
誌すもの之工巧終公雄中空東宗ハ冬翔昌腸陽城ハ庚

# 東海姬氏國百世代天工

唐より東の方れ海に有姫氏の國之姫姓ハ后稷小出て周則  
姬姓之周の祖先呉の太伯日本に來て國と關ゆへ姫氏の國  
と云又一説小宗唐天照皇太神女體小在す由姫氏の國と  
云姫ハ婦人の美稱之百世ハ大數と興て云天神七代地神五

代の時民と理治の六人意よあふ次天地の造化天の工と云の  
り百世の後其天工に代て人王世小出て民と治政は執行の

# 右司為輔翼 衡主建元功

神代は津速産靈神の孫天兒屋根命高皇産靈神の子天  
太玉命二人天照太神の勅に仍て左右の臣として輔翼て政と成  
の神武帝東征して長髓彦の如き命に逆ふ者と征伐して  
国は治る時又彼二神の子孫天種子命天富命左右輔翼  
の臣として右司と云て左の字も兼るは衡主は用明帝の皇子聖  
徳太子衡岳の惠思大師の後身として衡主と云主は崇る詞太子  
ハ二十四代推古天皇の朝に攝政となり冠位十二階と定め位の高  
卑當色の絹は以て冠を縫せて諸臣に賜ふ日本冠の權輿なり

元ハ大の意聖徳太子執政  
大なる功と建あふと云るなり

# 初興治法事 終成祭祖宗

聖徳太子初興十七箇條の憲法は定り國は治るは事と興  
終は先祖宗族の祭祀は成一本と忘るは是は教一示しあふ  
論語も終は慎遠を追ふは  
民の徳厚く歸すととも見へる

治法一本作和法

# 本枝周天壤 君臣定始終

君ハ本之臣ハ枝之天壤ハ莊子也出て天地と云一同ありつらと  
訓を上下和睦し子孫天地に周く繁榮さると君ハ臣と愛





攝政と成後忠仁公と謚と是之爾來彼子孫連綿  
として又重職に任じざる也子孫昌と云云なり

# 白龍游失水 窘急寄胡城

白ハ庚の色龍ハ辰之四十六代孝謙女帝天平十二庚辰の誕生  
あて此帝在位嬪行度外道鏡と寵しあふと太過り此故  
小九族親族諸臣朝せぬ民の望み失は是白龍の故に游遊て其  
憑所の水成失ひる等一窘急ハ迫困之都と捨て去て道鏡の跡を  
慕ひ下野の薬師寺へ下りゆくと胡城に寄ると胡の字ハ帝  
城に對して云一説に帝と龍に比るとハ通例なり白ハ赤に對ると陰之  
孝謙帝女主也  
白龍と云なり

# 黃雞代人食 黒鼠食牛膾

黄ハ巳の色雞ハ酉之平親王將門寛平元巳酉小生也野州相  
馬小内裡と構へ百官と立東ハ箇國小自立王と潜稱を人  
に代て食ふの謂之黒ハ壬の色鼠ハ子之平相国清盛長承元  
壬子に生を保元平治の亂小源氏と戦ひ爲義以下討亡て  
威と海内に振ひ官太政大臣小至り女と高倉帝の中宮に入ぬ  
建禮門院是之後白河帝ハ鳥羽に押篋高倉帝と新院と稱し  
政事皆清盛の手に出四海と腦亂せぬ君臣の禮と亂り  
祭祀と奉せぬ己其肉と食ふ牛膾ハ異國祭祀小獸肉と  
用と假て云日本を佛教入る  
前ハ都て祭に肉食を供せし

丹水流盡後 天命在三公

禁庭と丹墀と云丹水の帝王の恩澤に譬ふ丹陽の赤色水も潤澤之壽永の亂に安徳帝入水ありて後王道衰弊政諸侯

より出ると天の命三公不在と云異朝也太師太傅太保と三公に日本太政大臣左大臣右大臣之義朝の三男右兵衛佐頼朝

義旗翻して平家と傾け天下を平治せしが大切に依て日本惣追捕使を賜は以來天下の政道再び天子に復さるるれば

此三公頼朝頼家實朝の三卿も通る心あり

百王流畢竭 猿犬稱英雄

百王代を流畢く竭て後八申戌の歳に人出て威四海小加ん

定山名右金吾入道宗全應永十甲申に生る細川右京北

勝元永享二庚戌小生る英雄の名は稱せし應仁の大亂有

英ハ草の精秀るれハの雄ハ獸の群に勝る云假く人の抜

星流飛野外 鐘鼓喧國中

伏羲氏の古管天の恒星を以て萬民小諭ふ星流て野外に

亂成憂て天下の庶民野外に遁を走れ之國中を責鐘攻

青丘與赤土 茫茫遂為空

青丘新羅の國松樹多く青々として云其南に當る日本國も南方丙丁の色と假て赤土と云二國俱に終小茫茫

辨正

野馬臺の詩本朝一人一首卷の九に出て人口に傳稱とて舊其解の如さ述る所のごとく傳來より然ども

不替孟浪の作を於て學者皆知る所之其二代辨論左の如し

四十五代聖武の御時仲九遣唐使として梁の武帝に見於るとあるは梁の時我國ハ二十六代武烈帝御治世より

聖武帝の御時異朝ハ唐の玄宗帝より二百餘年差あり

遣唐使の始ハ三十四代推古帝の御時より此事之我朝の史城按ざるハ四十二代元正帝靈龜二丙辰八月多治

比の縣守遣唐使より藤原宇合副使より此時下道眞備吉備公の時阿倍仲磨時二十學問の爲よ入唐此以前

を遣唐使のまども 梁の武帝の世に未有之推古帝の  
御時彼国ハ隋の煬帝不當と始と最仲麿の年歴ハ  
諸書紛々をり 仲丸吉備同時入唐のことハ史に見へり  
王代一覽和漢年表等に出る所大同小異也

○宦物微乏として仲丸弑殺史子細く吉備公ハ国法  
咎りた弑殺と云ふの難事ハ計りてハ如何日本も  
罪あり仲丸と殺さる其不禮也問ど次度の唐使と渡り  
如く柔弱の国にわたり本朝の威武ハ異域も知る所よ  
我國へ不敬とありては聞か人の能否ハ生質るは不  
才の人とて是と殺國法わたりや況贈物の多寡と心と

使臣弑殺悪とる卑劣ハ夷狄の王よりたまうのべりや

○仲丸と彼國にて傳と和漢の記録を見り仲丸彼土に留  
學せしも明之近く人の知る処唐詩五言排律に秘書晁監が  
日本へ還るに送る王維が詩ハ仲丸玄宗帝ハ時秘書監の官と  
本邦へ歸ると有(其送別の詩より仲麿ハ後壽と以て唐土  
小卒とすと必定るは荒原の赤鬼と成と六浮屠氏人々惑  
ひる僻説之唐書列傳二百二十小曰朝臣仲滿易姓名曰朝衡  
是仲丸之又晁衡とを書きり

○日本和州長谷寺ハ觀音吉備公の懇祈より一夜に千  
里の海を涉り彼地に蜘蛛と現れ出るも誠心の感格ハ左も

あんぞと自在と云ふと云ふ赤鬼又何ぞ神通と以て讀みと云  
教ごらや

○五十一代桓武帝小野の篁に命じて野馬臺と讀みぬのふ  
能ごとて又觀音の祈ると云ふも不審篁は五十二代嵯峨帝の  
弘仁年中仕へて參議に至り五十五代文德帝仁壽二壬申十  
二月二十日小卒と云ふ有桓武帝の御時といふ觀音再度  
も蜘蛛と現るる頗不自在と云ふ可笑

○梁の宝誌和尚此文を作ると云ふ附會の説なり何ぞ殊  
邦千歳の後と豫免知人や聖德太子天王寺の未來記等  
の妄説を擬して杜撰と云ふの如し又宝誌の聞ゆる碩徳の僧

うまの華麗の文は作出し周興嗣が次韻せり千字文の如し  
至むた此野馬臺の文僅一百二十字中を流三字百二字  
終二字中二字後二字天二字国二字水二字孫二字代二字爲  
二字何ぞ斯不自在と云ふ文も同字は諱しとあはれふのふと  
拙み似たり文勢母於ても一句の感吟と云ふ處無とや作者  
和漢の歴史城子細めせの強て兒女子は迷む妹は我日  
本ハ七代五代の神城祖と云ふ自他各神の苗裔より然るは  
姫氏の国と云ふ異國の孫と云ふ始に聖德太子と贊美し  
ころは全浮圖氏の手にて作せり其以下大伴の亂孝謙女帝  
の穢行より相国清盛三公等の句不當の証言多し

孝謙帝は庚辰の生まると云て白龍と云るも差へり養老  
三巴未の生まるといひ神護慶雲四庚戌八月四日五十二  
崩御す

清盛は壬子の生れりて黒鼠の諭ふ元永元成  
成小生ま養和元年五月四日六十四めて逝去お是と  
以其他年歴の差違は察す

青丘は新羅の事と云杖桑未來記と云野馬臺の文  
小他邦の預る所は決末に鐘鼓國中に喧とい結句は茫々  
とて遂に空と云るど兒不善の語と云此作者宝誌和尚  
の名は假若日域の人と云國朝と憚る昏愚の罪人とす

安倍仲磨傳

安倍 昔ハ阿部と云 新撰姓氏錄に 孝元帝の

皇子大彥命の後とあり父祖取見す中務太輔船守

の子と云又船守ハ同船セリ人の名とも云實證これ

靈龜二年 唐の玄宗 開元二年 八月多治比真人縣主等遣唐使

の時仲磨と留學生として入唐セリある仲磨朝臣の

朝と氏と一名と朝衡と改む晁衡とも云朝晁音舊唐

書新唐書に見る一説に使と奉トて一ハ日本の

父母に歸寧一再唐に入安史が亂に逢て終に歸らず

或ハ儀王の友と云或ハ新羅に在書と附して故郷の親族

送とほきども再入唐とるのあひ續日本紀に天平勝宝遣  
 唐大使藤原朝臣清河卿副使以下入唐其復命の  
 時晁衡も本邦に歸らんとて明州の津小舟出ると時  
 別斌惜と詩を贈る王維が詩ハ唐詩選排律に出色信詩  
 ハ文苑英華に出此時海の面に月こけり我見て我國の  
 神代より斯歌と詠とて

天乃原布利佐計着 礼波 春日奈留 三笠乃山尔出月加毛  
 古今和哥集羈旅の部に入詩を作らしてが文苑英華に出  
 既に唐土と去て大洋に艦と解るの暴風荒波の爲に唐土へ  
 吹反さる仲満溺死すと聞しと李太白哭晁卿衡詩

日本晁卿辭帝都征帆一片繞蓬壺明月不歸沈碧海  
 白雲秋色滿蒼梧 と作ら然に仲満恙あくして再唐帝  
 以奉仕せり 清河卿も竟に 四十六年留學して官秘書監より左  
 補闕を経て左散騎常侍鎮南都護に至侍従の臣より唐書景  
 出薨して 一説ハ七十 開国公に封が 潞州大都督に贈りて 日本こ  
 と贈官正二位と賜し 光仁帝宝龜十年 唐代宗に 五月前學  
 生阿倍朝臣仲磨唐に在て亡本朝の家口偏に之く葬礼欠  
 こころの勅して東絹百匹白綿三百疋と賜と續日本紀に見ゆ  
 仁明帝養和三年 唐文宗 五月附聘唐使贈遣往歲啣本朝命  
 入唐使並留學等在彼身没者八人位記以慰幽魂仲

磨其一人也續日本後紀

詔詞曰

故留學問贈從二品安倍朝臣仲滿。大唐光祿大夫右散騎常侍兼御史中丞北海郡開國公贈潞州大都督朝衡。可贈正二品身涉鯨波。業成麟角。詞峯聳峻。學海揚漪。顯位斯昇。英聲已播。如何不救。莫遂言歸。唯有檢天之章。長傳擲地之響。追貴幽壤。既降於前命。重叙崇班。俾洽於命。詔和漢の記録に顯然として其正しきもの斯の如く此外班々書に見ゆ外類として其も取に足らず

以上述る所先哲の論辨少く臆見或交々識之世小行

る野馬臺の詩虎關禪師の序と云傳るわり或疑之云

虎關師又文雅の名有此序の如く他文小見る拙然を

本文小宝誌或售序文小虎關或偽ると左をあらん

干岩寛政九龍集丁巳孟春穀旦

東武高井伴寛思明選并書

文政五壬午季夏再刺





跋

大石喜章撰

蜜不舐不知其甘。薑噬之始知其辛。物皆然矣。如詩書不味之何。知其美惡乎。外兄蘭山螢雪有年著述頗多。嘗因書肆需解野馬臺之文。而句句都巨細至辨。謬誤可謂詳明焉。童蒙於是始知薑自不可混蜜而已。



今 清 宋詩選 小本二冊	溫公 中山 宋三家詩話 全一冊
宋 一大家絕句 全一冊	陸放翁詩話 全一冊
同 箋解 全二冊	徐而庵詩話 全一冊
廣 二大家絕句 全一冊	浩然齋詩話 全一冊
宋 詩清絕 全一冊	寬齋如亭 詩佛五山 今四家絕句 二冊
題 畫詩類抄 小本二冊	五山堂詩話 全十卷
西 湖竹枝 小本二冊	寬齋先生 談唐詩選 小本一冊
三 體唐詩 合別 嗣出 板元	江戶日本橋通二丁目 山城屋佐兵衛

